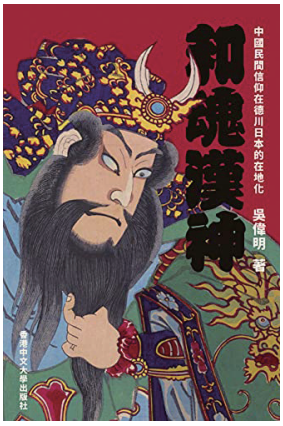
書評

呉偉明『和魂漢神——徳川日本における中国民間信仰の在地化』

呉偉明『和魂漢神：中國民間信仰在德川日本的在地化』

馬　冰



香港中文大學出版社、2020 年

本書はタイトルを「和魂漢神」とするように、中国の民間で信仰された神が日本に伝来してから、徳川時代に「日本化」されることによって、大和の魂を持つようになったという主旨のもと、神話伝説の帝王である伏羲、神農、禹、文武二聖の孔子、関帝、守護神の媽祖、石敢当、鍾馗という八つの神を取り上げて、徳川日本における受容と変容を考察したモノグラフである。それぞれの神を一つの章に宛てて、徳川時代以前の崇拝と信仰の様相を紹介し、徳川時代の形象の変容や、祭祀方法の変化、文芸作品の中の独自的表象などを、一次資料で説明している。箇条書きにまとめられているのに加え、著者が撮影した多様な写真と資料の図絵も挿されているので、門外漢でも内容がわかりやすい一冊だと言える。

本書は中国語で書かれているので、日本を越境・往還する中国の神の表現として「漢神」というのは差し支えがないが、日本語で「漢神」と言う場合、『続日本紀』に「諸国で行われて、牛馬を殺して供犠した」と記録された神を指すのが一般的である。現在は外国の神をいうには、「外来神」「異神」「蕃神」のほうがよく使われている。本書では、外に拒まれているかのように思われる「外来神」や、耳慣れぬ異貌の神々を意味する「異神」よりも、外から入り込んだ後に定着し、その国、その土地で信仰の対象とされるようになった「蕃神」という言葉が、訳語として適切だろう。

中国の神が徳川時代の宗教思想、民間風習、そして文芸作品に吸収され変容する現象について、著者は冒頭に、地方化（localization）、土着化（indigenization）という宗教の理論に言及して

いるが、著者が述べているように本書は宗教専門の研究書というよりも、むしろ文化史の視座で神や信仰に関する文化現象を考察したものである。信仰の担い手となる寺院や石碑などの遺跡を紹介するだけでなく、民間生活の中の風習や、小説、劇といった文芸における虚像も、中国から伝来した蕃神が近世に受容され変容したことの表象として考察されている。

中国に起源する民間信仰の神々は、日本に入り込むと強い流動性を示し、宗教学でいう土着化、文化研究でいう受容と変容の様相を見せる。この点に注目して徳川日本の宗教と信仰のあり方、および日中文化交流史を検討する場合、まずは八百万ともいわれる神々を信仰する徳川日本の民間信仰の中の位置付けを考える必要がある。

本書は近世の日本で見られた文化表象として信仰、風俗、文化などをある程度カバーしている。著者は明確に指摘していないが、日本在来の神仏の多くは、目に見える信仰対象や、文献に残された記述などが数え切れないほどあるのに対して、蕃神のほとんどは徳川日本においてマイノリティの存在であったことは間違いないだろう。さらに、夥しい蕃神の中でも、牛頭天王のように信仰が現在まで定着している例と比べ、本書で取り扱っている神々は決してメジャーな存在ではない。伏羲と神農は儒学者のように知識のある人たちだけには認識されて崇拝されたが、徳川日本ではそれほど浸透していない。そして、中国商人が集住した長崎の関帝信仰や媽祖信仰にも、また琉球の石敢当にも、強い地域性が見られ、日本全土には普及していない。いずれも徳川時代の日本人になじみのない神だと推測できる。

次位的な信仰でありながら、徳川日本を多角的に考察できることは、蕃神の研究として従来から認められている学術価値である。本書では複数の信仰を取り上げることによって、多方面から外来した信仰のありかたを考察することができる。

中国の民間信仰が日本に根付き、今も信仰の痕跡が残っていることからは、民間信仰の多様さと、江戸時代の民間による日中交流史の一端が窺えるし、政権間の「鎖国」という政策の中でも特定の地域では民間交流が絶たれなかったどころか、盛んに行われたという歴史を垣間見ることができる。古くから日本人の信仰対象となった蕃神が江戸時代に民間に浸透し、他の神仏とも習合した現象からは、近世宗教と信仰思想の変容を見ることができる。一方、江戸時代に町人文化、都市文化、生活文化と大衆文化が栄えたことを社会的背景として、マイノリティの蕃神が日本人の手によってそこに加えられて、江戸文化にすっかり融合した。こうして中国の要素を利用して日本文化が構築される、という結論が裏付けられる。

例えば、中国人の商人が活動していた長崎は、媽祖信仰ととも

に関帝信仰の中心となった。また九州は石敢当の主な信仰地域である。無論、このような信仰の地域性が形成されたのは、近世に海を挟んで中国と日本の間を行き来した人々によるものであった。蕃神への信仰は中国人圏を越え、日本人の風習に適応した内容と形式へと変化していった。さらに、歌舞伎、浄瑠璃といった日本独自の芸能にも関帝などの蕃神が出現し、徳川時代の日本人が享受するようになった。このように、中国の民間信仰としての「漢神」は、徳川日本において完全に日本風の魂へと取り替えられてしまった。

本書では、蕃神に関する文化表象を主に「宗教」「風習」「文芸」に意図的に分類して論じているが、三者の間には明確には区別できないものがある。また先述した関帝信仰の例から見てみると、そもそも中国から伝来した信仰は、人々の移動によって生活とともに定着してきたものであるので、習慣として生活の中で普通に行われ、文芸作品にも表現された。本書では、関羽の御迎人形と山鉾が「宗教」の文化現象とされるが、毎年行われる祭りとして一種の「風習」としても理解できるだろう。また関羽を描いた絵画や、関羽を扱う随筆・小説は「文芸」の表象とされているが、これらは関帝信仰が普及している所以でもあるのではないか。このように、民間信仰は生活に浸透しているため、宗教の厳粛的信仰は風習としても定着する可能性があり、多種多様な文芸作品に登場することもありえる。「宗教」「風習」「文芸」という三者の境界は曖昧なものであり、本書で用いられた分類方法は検討し直す余地があるかと思われる。

日本に渡来した中国の蕃神は、決して本書で取り扱っている八神に限られず、他にも泰山府君、七福神、摩多羅神など数多くが挙げられる。いずれの蕃神も日本に伝来してから日本の宗教思想や生活風習などの中に受容されて変容していったことはいうまでもない。しかしながら、神々の土着化、あるいは受容と変容には、普遍的な要素があることにも注目したい。

宗教も思想も信仰も、起源地を離れると、多かれ少なかれ時代と現地の状況に応じて変化させられることはいうまでもない。形象であろうが、機能であろうが、みな基本的性格をベースにして信仰が築かれる。古代の理想的な治世君王である伏羲、治水の神とされる禹、人々に医療と農耕の術を教えた神農、そして、忠義を貫く武将の関羽、儒教の聖人である孔子など、それぞれが信仰のキーワードを持っている。その芯として一貫するものが、神が神であることを支えているからこそ、彼らは脱線せずに変容しえるのである。中国の神々は徳川日本では文化の一要素として吸収される結末になったが、それぞれの神が日本風の魂をカバーして不変の安定的なものになる過程を明確にすれば、「和魂漢神」の土着化の真髄により迫ることができるだろう。